

## 年の始めのためしとして

近頃、とうに忘れてしまっていた言葉が、ぽかっと頭に浮んで来ることがある。“四方拝”もそのひとつだ。一般に使われなくなって半世紀以上もたつたろう。今どれほどの人に記憶があるだろうか。

国民の祝日は、学校やお役所や会社は休日と決まっているが、昔はそうではなかった。終戦まで、小中学校では祝日には登校して儀式があった。式歌をうたい、校長先生のお話があり、紅白のまんじゅうをもらえる事もあった。元旦のその儀式が“四方拝”である。

冬休中でも、元旦は登校日である。朝、家の前に雪が積っていれば、竹で編んだ雪かきを使って除雪するのが年の最初の私の仕事。次いで、日の丸のついた竿を門柱に飾り、玄関の式台に名刺受けの黒塗りの盆を置く。これが例年の努めだった。(といっても大層な家ではない。ごく下層のサラリーマンの借家住いでこうだったのだ)。雑煮を食べて、やりかけの冬休み帳も持参で登校する。

そして冷え切った運動場で“四方拝”の式がある。前日までは“もういくつ寝るとお正月”と、妹たちと小遣いを心待ちにしていたのが、元旦の朝の登校後は神妙に“四方拝”の式歌を斉唱することになる。考えてみると、半世紀前の年末年始は歌で終わり歌で始まる勘定になっていた。その四方拝の歌は今もやや残っている。

年の始めのためしとして、終わりなき世のめでたさを……という例の歌である。三節目を“松竹ひっくり返して大騒ぎ”と替歌にして叱られるのも例年のことだった。

さて、式が終わって教室に入り、担任の先生から、紅白の餅かまんじゅうを頂戴するのだが、その前に、宿題の冬休み帳真面目にやっているかどうかチェックされる。これがイヤだった。“明日でもいいのに今日する事はない”という怠惰な私は元旦早々担任の眼を恐れなければならないのだ。四方拝は年最初の厄日でもあった。

だから、年の始めのためしとして…の“ためし”とは恒例という意味の“例し”ではなく、テストの“試し”だとずっと思っていた。